

何かとメディアで紹介される「河和田地区」
 三方を山に囲まれた町に、県外から若者が移住、就職、さらには起業する若者もいる。
 でも、そればかりではない。「町を元気にしたい」と地元愛に燃える若者も動き出した。
 そんな、河和田の「若者新風」を紹介します。

木地師、塗師、蒔絵師。産地・河和田に頼もしい後継者

坂本奈緒子さん 39歳（奈良県出身）

奈良県の実家が家具の卸売業ということもあり、地元的高等技術専門校の家具工芸科に通いました。卒業後、「お椀をつくりたい」との思いから、石川県にあるろくろの技術を学べる研修所に入りました。卒業間際に、河和田で木地師を探していることを知り、無縁の産地・河和田への就職を決意。今年4月から越前漆器協同組合の職員として働きながら、工房で腕を磨いています。



ろくろと手製のかんなで木地を挽く坂本さん

産地の木地師は高齢で後継者育成が急務と言われる中、初の「女性木地師」として坂本さんへの期待は大きい。
 職人さんから声を掛けられるのも期待されていることのひとつと前向きに捉えているようで、「ろくろ技術を習得し、形そして数もそろえられるようにしていきたい」と抱負を語るとともに、「せっかく3人いるんだから、何かできるといいな...」と商品作りへの意欲を話すなど、終始明るい表情で答えてくれました。

阿久津勇太さん 33歳（神奈川県出身）

「木固め」をする阿久津さん
 京都伝統工芸大学校卒業後、漆芸を経て大学時代の先生の紹介で今年2月から越前漆器協同組合の職員として、管理運営業務や体験業務をしながら塗りの技術を学んでいます。
 河和田に来て半年。阿久津さんは「河和田はよそものを受け入れてくれる温かさを感じる」と、河和田の印象を話すとともに、「河和田の職人さんはオープンだし、組合で働いていると異業種の人も含めていろんな人と会えるのがいい」と仕事の環境の良さも話していました。



お椀を塗りながら、時折笑顔を見せるも、そのまなざしは真剣。将来について尋ねると、「二人前の職人になって、いま自分に親切にしてくれている職人さんたちに、あいつがきてくれてよかった、あいつは一人前になったなと言われるような職人になりたい。技術を習得し職人として地域に恩返しをしたい」と、力強く語っていました。

宮下亜季さん 26歳（福岡県出身）

京都伝統工芸大学時代に漆芸を学び文化財の修復をしていました。卒業後はその道に進みましたが、もともとのづくりが好きだったため、特技を生かしてもっと繊細なものを作りたいとの思いから、大学時代の恩師と相談した時に、河和田の話聞き蒔絵職人の道を選びました。



小さなお椀ストラップに蒔絵を施す宮下さん

現在は、越前漆器協同組合の職員として働きながら、会館の職人工房で技術を磨いています。「河和田の職人さんは元氣。活気がある産地へ行きたかった」と産地の印象を話す宮下さん。今はしっかり技術を学んで河和田の職人さんになりたいと意気込みを語りました。この日は、漆器のお椀ストラップに、蒔絵でつつじや松、梅の花を描き、「自分が描いたストラップが売れるとうれしいんです！」と笑顔で話していました。



“ものづくり”を通して交流空間を提供「PARK」

真夏の週末、照りつける太陽のもと、若い男女がラポーゼかわだに集まりました。「ものづくり合コン」。仕掛けたのは、20代～40代の県外からのI・Uターン者など10人で立ち上げた「PARK」。代表理事の浜口真一さん(45歳)に、どのような人たちの集まりですか、と尋ねると「一言では…」と少々困惑気味。それだけ、個々の思いが強い人たちの集まりなのでしょう。県外からの移住者が多く、河和田の産業や風土に魅力を感じ、この地に就職してこの地でがんばっていこうという若者の集まりだからこそこの答えだと感じました。

PARKの目的は、「創造的な地域と人材を産み出す空間の提供をしていくこと」。浜口さんは、「未来を担う人材や起業家の育成、それと定住・移住の促進や地域資源の活用を通して、地域生活文化をゆっくりと成長させていきたいと考えています。それを達成するためにいろんなことをやっていきたい」と話してくれました。



「ものづくり合コン」の打ち合わせをするPARKメンバー

今回の「ものづくり合コン」は、協働によるものづくりを通じた人との交流により、心の垣根や概念を乗り越え、関わる全ての人々が共に生きていく仲間となる…そのためのきっかけづくりや場の提供であったり、ものづくりのまち、鯖江にある「モノを通じた対話」を感じていたPARKメンバーが企画したプログラムだと言います。

メンバーは眼鏡職人、木工職人、環境NPO職員など職種は違っても、河和田へ来た理由や思いは似たところがあるし、またこだわりもある。そんな彼らだからこそできるプログラム。参加者自身がものづくり、時には協働で行うなど、まさに「ものづくりを通じた人との交流」を実現していました。

メンバーは、「初めて出会う人たちの未来の関係性を創り出したことや、参加者の皆さんに鯖江、河和田を好きになってもらえたことをとても嬉しく思っています」と、今回の「合コン」に対して、「合格」といったところでしょうか。

今後の活動について浜口さんは、「河和田の空き工場を改修し、地域内外の人たちが交流する施設(シェアハウス、シェアオフィス、シェアファクトリー“ファブラボ”)として利用できるよう準備をしています。その場を利用して未来志向の対話の場を作り出し、移住定住やUターンの促進、また、起業家育成やアイデア創発の場(フューチャーセンター)として使用し、創造的な地域文化を作り出すお手伝いをしていきたい」と抱負を述べました。またひとつ新たな試みがPARKから始まろうとしています。

※「PARK」の情報はこちらから→ [f https://www.facebook.com/park.kawada](https://www.facebook.com/park.kawada)



「ものづくり合コン」参加者が食器用の器を製作。蒔絵で華やかに。

“地元・河和田”を愛する若者「越前隊」

関和宏さん 36歳(尾花町)
関啓晶さん 38歳(尾花町)

内藤琢也さん 36歳(河和田町)
渡辺誠之さん 36歳(河和田町)

昨年秋に「越前隊」を結成した関和宏さん、関啓晶さん、内藤さんの3人は、「自分たちが住む河和田を良くしたい、多くの人に河和田に来てもらいたい」との思いで、幼い時から身近にあった、河和田の伝統薬味「山うに」に目を付けました。山うにはゆずやトウガラシ、塩を練り合わせた薬味。アイス好きの内藤さんが、市販のアイスに山うにを混ぜてみたところ、これがなかなかの味。「これいけるかも…」自分たちで山うにを手作りし、何度も分量を調整し、ようやく「山うにアイス」が完成しました。3人とも飲食業の経験がないので、知人や保健所に相談するところからスタート。自分たちの力で山うにアイスをPRし、今では道の駅「西山公園」をはじめ、県内十数店舗で販売するまでになりました。

アイデアはもう一つ。薬味としているような料理に合う山うにを、今度はたこ焼きの生地に足してみると、醤油味に山うにの風味がマッチング。こうして生まれたのが「山うにたこ焼き」。今年4月には屋台を購入し、週末には道の駅「西山公園」に出店、ご縁市などのイベントにも出店しています。

そんな彼らの活動に共感したのが、長岡市出身の渡辺さん。渡辺さんの奥さんとメンバーが同級生ということもあり意気投合。応援ソング「山うにブギ」を制作し、小学校などで披露しています。渡辺さんは、「地元の若者の活気を感じた」と話していました。

先日、銀座の「食の館 福井館」で山うにたこ焼きをPRしてきた際には、まだまだ広がりを感じなかったそうです。関和宏さんは、「河和田ファンをつくりたい。その人たちに河和田に来てもらいたいんです。これは夢ですが、河和田の見晴らしのいい場所に、『山うに屋』を開いて、たくさんの人に食べに来てもらいたい。僕たちの活動を通して、河和田に人が来る理由を作っていきたい」と熱く語っていました。

彼らの話を聞いていると、また新しい次の何かが出てきそうな、そんな期待感を持ちました。



不思議なおいしさの「山うにアイス」



河和田小で「山うにブギ」を歌う、渡辺さん(右)と関和宏さん。



屋台で「山うにたこ焼き」を販売する内藤さん